

## Bort-Les-Orgues Les mots sous le lac, récits et témoignages d'avant le barrage

(ポール・レ・ゾルグ、湖面の下のことば 「ダム以前」の物語と証言)



アルメル・フォール 著  
アデライード・メゾナーブ 写真  
Editions Privat 2012

名古屋市長大学大学院人間文化研究科  
佐野 直子

A4版を少し超える大きな本の表紙は、ほとんど実物大であろう老女の手に乗せられた小さな花で飾られている。全編カラーの美しいフランスの湖面や古城、古い村や家、そしてそこに住む村人のポートレートが掲載された写真集のように見えるこの本は、しかし、ばらばらと楽しくめくれる(だけの)ものではない。写真家アデライード・メゾナーブ氏

の写真と共に掲載されるのは、フランスの人類学者アルメル・フォール氏が聞き取った、六〇年前に故郷がダムに沈んだ人びとの証言集である。「そこ」に住む村人、ではなく、「そこ」から追い立てられ、それでもふるさとを沈めた湖が見える場所に住み続けていたり、一家離散していた兄弟が今回の聞き取りプロジェクトで久々に再会したりした、そのような人びとの物語 (Témoignage) である。

フランスの中央山塊から西に流れ、ボルドー近くでガロンヌ川と合流して大西洋にいたるドルドーニュ川(本書には地図が掲載されていないのが残念)は、周辺の渓谷の豊かな自然に恵まれ、漁業と材木を運ぶ河川運輸が非常に盛んな川であった。しかし二〇世紀に入り木材需要が減少した一方で電力需要が高まると、その豊富な水量を発電に利用しようとする計画が立ち上がる。一九三〇年代からダムが建設されはじめ、現在はドルドーニュ本流の大きなものだけで五つのダムがある(揚水ダムも計画中)。その中で、ポール・レ・ゾルグのダムはドルドーニュ川最上流にあり、一九五二年完成当時はヨーロッパ最大規模であったという。このダムの建設によっていくつもの村が湖面に沈み、一三〇から一四〇世帯が立ち退きを余儀なくさ

れた。丘陵の上に建てられた中世の城は、その豊かな領地の大半を失い、現在はダムによってできた人造湖の湖水ぎりぎりに残され、その美しい姿をうつつしている。

ダムなどの巨大インフラ建設に伴う住民移転の問題は、もちろんこのダムに限ったことではない。同時代にフランスの多くの河川でダムが建設されたし(それは日本でも同様である)、現在世界には四万ほどのダムがあり、さらに五千から一万のダムが建設中であるという。そしてその建設に伴って、中国の三峡ダム一つだけでも一五〇万人もの住民が移転を強いられたという(T. U.)。

これらのインフラ事業を発展途上国で実施するための開発プロジェクトを担った国際機関の一つである世界銀行は、その事業の成功のための環境アセスメント、そして建設予定地で生活してきた人びとの住民移転の問題にも積極的に取り組んできた。アルメル・フォール氏(一九五七年生)は、アフリカのブルキナ・ファソにおける巨大ダム建設に伴う住民移転と生活への影響についてのフィールドワークをもとに学位を一九九一年に取得し、世界銀行でアフリカ諸国やマダガスカル、中国などでの巨大インフラ事業にもなう住民・地域の社会的文化的な影響についての問題に約三〇年にわたって

従事してきた人類学者である。しかし、巨大ダム建設に伴う住民移転が母国フランスでも起きていたこと、そして、それらの人びとの声を聞く試みがなされないまま忘れ去られようとしていることに気づいたのは最近のことであったという。

そこで彼女はダムのあるコレーズ県とカンタル県の公文書館、そしてフランス電力の援助を得て、ダムが建設される前のドルドーニュ川を知っている人びと、建設に携わった人びと、そして何よりも、ダムに沈んでしまった村の住民たちを探し出し、彼ら彼女ら一〇〇人の声をオーラル・アーカイブとして保存するという「一〇〇人の証人」プロジェクトを立ち上げた。二〇一五年ようやく一〇〇人への聞き取り調査が終了し、今後そのアーカイブの保存・活用事業に入るといだが、本書はそのうち三十一人、特にポール・レ・ゾルグダムによって沈んでしまったポール・ディユー村、ミアレ村などいくつかの村と、今はカンタル県でもっとも有名な観光地の一つである「湖面に浮かぶ城」となったヴァル城(Chateau de Val)の元住民たち、またダム建設に従事した人びとの聞き取りを、ポール・レ・ゾルグダム建設六〇周年を機にまとめたものである。

建設から半世紀以上を経てからの

調査にもかかわらず、人びとは多くのことを記憶し、そして何よりも記録していた。家にはダムに沈む前の村の風景の絵や写真が飾られ、当時の地図や書類、使っていた道具などが保管されていた。本書にも掲載されている古い写真の多くはインフォマントから提供されたものであり、「二〇〇人の証人」プロジェクトには、それらの資料をデジタル化して保管することも含まれている。

ポール・ディユー村はパリまでの直通列車の通る駅のある村で、周辺地域の子どものあつまる小学校があり、家畜市が開催される地域の中心地だった。ドルドーニュ川を眼前にしているためしばしば洪水にあったが、川のマス釣りも盛んであった。コレーズ県は第二次世界大戦中には対独レジスタンス活動の一つであるマキ (Maquis) 部隊の作戦が活発だった地域でもあり、ポール・ディユー村もマキの活動拠点の一つであった。その村が沈むことが決定したとき、村民は水没地域の住民一〇〇人から一七〇人をまるごと受け入れる村を近隣に新しく建設することを要求した。戦死者記念碑や家畜市広場にあった十字架が移転された。フランス電力や政府を巻き込んだ村民全体の近隣地域への移転を成功させたことは、その後の住民移転政策の方向を決定づけるものとな

り、その成果を誇ってもよいのかもしれない。しかし、深くえぐられた谷が続くドルドーニュ川流域において、「上の奴ら」と「下の奴ら」はその生業、メンタリテイ、支持政党にいたるまで全て異なっていた。生活の激しい変容を受け入れることには、大きな困難と苦しみが伴い、新しい村に移転せずに土地を離れた者も多かった。

ドルドーニュ川流域の人びとにとって、「家」は単なる建物以上の意味をもつ。人びとはそこで出産し、結婚し、息を引き取る。時には数百年にも及ぶ家族の歴史そのものである。その家が水没することが決定されたとき、石造りの家の屋根瓦まで一つ一つ解体して、それをそのまま一つ一つ積み直してまるごと再築した人がいる。一方で、フランス電力に接収されて解体されることに耐えられず、自らダイナマイトをしかけて家を爆破した人もいた。ミアレ村でレストラン「シエ・ポミエ」を経営していた家の孫娘であったミッシェル・ガティニヨルさんは、繁盛していた当時のレストラン、家で行われた家族の結婚式の写真などとともに、谷がまさに水没していく瞬間の写真を残していた。伯父のエルネストは、二階にダムの水が上ってくるまで家にとどまり、窓から外に出たという。彼女の母親は亡くなるま

で自分のふるさとを失った悲しみから抜け出せなかった。「録音されて本になれば、私の谷のことをみんながずっと話してくれるでしょう。これで安心して死ねます」と彼女は語ったという。

戦後の、特に先進国から発展途上国への開発援助事業が増加する中で、「誰のための開発か」が問われ、開発の裏で地域住民、移転住民にさまざまな深刻な問題が起きることが指摘されるようになった。そのような研究の先駆者であるサイアー・スカッターとマイケル・チェルネアに本書は捧げられている。しかし、いわゆる先進国での開発事業における住民移転の問題を、特にその生活・文化の側面から注目し、住民に聞き取り調査を行う研究は実は非常に珍しいという。先進国での巨大ダム開発事業は戦前からの計画であることも多く、(強制的な) 住民移転がなくとも、農村部から都市部への住民の大量の移入が発生している中で、「近代化」に伴う「犠牲」は「進歩」の一部なのであり、それほど大きな問題ともみなされなかったと思われる。

その中で、先進国の事例に取り組む数少ない研究者である人間文化研究科の浜本篤史准教授が、「同じような研究をやっている」としてマイケル・チェルネア氏から紹介されたのがアルメル・フォール氏であった。そして彼女が十数年にわたって通ったというこのドルドーニュ川流域が、評者の研究対象であるオクシタン語地域であったことから、思いがけない形で研究交流が始まった。二〇一五年夏、評者がまずフォール氏に連れられてドルドーニュ川沿いに残る数少ない村であるアルジェンタとスポントゥールを訪れ、本書に掲載されているミアレ村のミッシェル・ガティニヨルさんを始めとするインフォマントを紹介していた。き、評者も特にオクシタン語話者である方々へのインタビューを行うことができた。オクシタン語もまた、「近代化」|| 「進歩」の前で消滅することが当然とみなされてきたことばであった。

本書はダム建設から六〇年を経たの聞き取り調査であり、本書に掲載されたインフォマントの写真はみな穏やかな表情で、インタビューは、ほんの一言二言のオクシタン語の言い回しやあだ名など以外は、「美しいフランス語」で書きとめられている。一九七〇年代にイタリアで刊行された、ヌート・レヴェエリリの『敗者の世界 (Il mondo dei vinti) 』の北イタリアの山間部の貧しい人びとのオクシタン語まじりの語りをそのままつぎつぎつぎつぎつとした不透明さがあるわけではな

い。本書はインフォーマントたちにとって、長い間顧みられなかった彼ら彼女らの苦しみに対する歴史の補償であり、癒しである、だからこそ「形」として残さなくてはならないということ強く意識して刊行された。そして「一〇〇人の証人」プロジェクトは「声なき人びとに声を与える」ことを目的としているとフォール氏は明言していた。

このように言う懐古的、感傷的な効果しかないように思われるかもしれないが、そうではない。

二〇一五年十月から十一月にかけて、今度はアルメル・フォール氏が人間文化研究科客員研究員として来日した。三種類の全く異なる講演会やセミナーを精力的にこなしてくださった中で、特に高浜市で行われたセミナーでは、自身の行った「一〇〇人の証人」プロジェクトから得られた「オーラル・アーカイブ」の効用を高浜市民の方々に説いた。地域住民の語りを録音・録画し、データとしてまとめることは、必然的に地域住民のみならず、その地方自治体や公文書館といった行政も巻き込んだダイナミズムをうみだす。何度も通って地域住民との信頼関係やネットワークを構築することで、当該地域住民が、自分たちが忘れていた地域史を取り戻し、それを保存し、「オーラル・アーカイブ」をこれか

らのために活用しようと考えるようになっていくという。一度誰かの語りを聞いてしまった者は、次の語りを誰かに伝える責任を負うのである。表紙から手渡された野の花は小さいが、重い。